

201 日本とフランスの天井の美（2023 年 10 月 10 日）

ヴェルサイユ宮殿の「鏡の間」やルーブル美術館などには、美しい天井画が描かれています。教会にも、祭壇の上に天井画が描かれていることがあります。このような天井画を見るときは、壁に掛けられた西洋絵画を見るときのように、時にはそれ以上に、西洋美術の美しさ、技術の高さや奥深さに圧倒されながら見ています。パリから約 70 キロ南東にあるフォンテーヌブロー城で天井を見上げたときには、それまでとは違った驚きを覚えました。

それは、鹿のギャラリーにある多色で模様が描かれた木造の梁（はり）や桁（けた）でした（写真右）。なぜなら、梁や桁といった天井を縦横に走る木材が、美しく装飾されているのを見たのが初めてだったからです。その後、ロワール渓谷にあるブロワ城（写真左下）、シュベルニー城（写真右下）やクロ・リュセ城、パリ郊外にあるブルトゥイユ城でも、同じように色鮮やかな細長い木材が走る天井を見ました。調べてみると、このような天井は 16 世紀から 17 世紀にかけて作られた「フランス式天井」と言われる天井であることが分かりました。



日本の城や寺院の中にも、美しく装飾された天井画が残るものがあります。有名な天井画の一つには、長野県小布施町にある岩松院の天井に描かれた「八方睨み鳳凰図」（<http://www.obusekanko.jp/obuse-guide/spot/gansho-in-temple/>）があります。これは、晩年の葛飾北斎が描いたとされる肉筆画です。21 畳分（約 34 平米）もある大きな絵で、伝説の鳥である鳳凰が描かれています。北斎と言えば、富嶽三十六景に代表される浮世絵や北斎漫画が有名ですが、このような迫力ある肉筆画も描きました。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

一般的に日本の美しい天井というと、格天井（ごうてんじょう）を思い浮かべます。格縁（ごうぶち）によって仕切られた格間（ごうま）の中に、美しい花が描かれている格天井があります（写真右は、奈良県にある橘寺の天井）。このように装飾された格天井を見たことはありましたが、天井を走る木材そのものに模様が描かれたものは、日本では見たことがありませんでした。ですので、天井を見上げたときに木材に模様が施されているのを見てとても驚きました。



日本もフランスも、美しく装飾された天井がある建物を建てることができたのは財力のある権力者で、彼らが華やかな装飾を好んだことは共通します。しかし、なぜ日本ではフランスのように、天井を走る木材に模様を描くことをしなかったのか考えてみました。一つに、日本の伝統的な建物は木造で、柱や障子にも木が使われており、建物の骨格を作る木材は装飾をしない方が調和が取れることが考えられます。また、日本人には、装飾がない部分があることで、装飾部分がより映えると考えた美意識があるように思われます。あくまでも推測に過ぎませんが、フランス人は、装飾できる部分にはできる限り美しく飾ることを好む一方で、日本の木造の建物では梁や桁を装飾する必要がなかったことが考えられます。同じ木材を使った天井であっても、フランスと日本の装飾の違いが興味深いと思いました。

天井と言えば、私がフランスで見た天井の中で一番驚いたものは、コルマールにあるバルトルディ美術館で見た天井です（写真右）。この美術館は、自由の女神像を作った彫刻家・オーギュスト・バルトルディ（1834-1904）の生家を一般公開しています。何と日本や中国の磁器がはめ込まれた天井があるのです！当時は、エキゾチックなアジア美術が流行していたのですが、本物の皿や花瓶をはめ込んでしまうとは、何とも斬新なアイディアです。天井を美しく飾りたいという思いは世界共通でも、その表現方法の違いに驚きと発見がありました。

